

## 初期真宗における無戒と念佛生活 高田顕智を中心に

|      |   |
|------|---|
| 著者   | 板敷 真純   |
| 著者別名 | ITAJIKI Masumi  |
| 雑誌名  | 東洋大学大学院紀要   |
| 号    | 54  |
| ページ  | 147-133   |
| 発行年  | 2017  |
| URL  | <a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009703/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009703/</a> |



## 初期真宗における無戒と念仏生活―高田顕智を中心に

文学研究科インド哲学仏教学専攻博士後期課程3年 板敷 真純

### はじめに

仏教において戒律は、戒は修行規則を守ろうとする自発的な精神、律は修行者の集団生活において守るべき規則をいう。特に律は仏教教団の秩序を維持する生活規範の側面を持っていた。親鸞の師匠である法然が作製し、弟子たちへ連著を求めた『七箇条起請文』の文中には、念仏聖集団内の戒行的統制を期待する制誡も見られる<sup>1</sup>。しかし親鸞が弟子たちをまとめるために規則、制誡を製作した痕跡は見られない。これは親鸞が持戒が成り立たない末法の世においては、破戒、無戒の罪業があるものでも往生が可能であると主張し、戒律を持つ僧は自力の行、自力の善であり、真実報土には生じないと説いたためである<sup>2</sup>。

一方親鸞の門弟たちは、門徒集団をまとめるために規範を定めていたことが、彼らの「制禁」から読み取れる<sup>3</sup>。先行研究では、彼らの念仏生活について、「制禁」をもとに研究されてきたが<sup>4</sup>、「制

禁」以外の資料から門弟たちの念仏生活を追究する研究は行われてこなかった。さらに従来の研究では、高田門徒について論究していないなどの問題点も存在している。本論では、高田顕智が記した『聞書』等に焦点をあてて分析を試みる。これにより高田門徒の念仏生活を明らかにしていきたい。

### 一 高田顕智の戒律に対する理解

高田門徒は下野高田（栃木県真岡市）を中心に活躍した門徒集団である。最初の指導者真仏（一二〇九―一二五八）は、親鸞面授の弟子で『親鸞聖人門侶交名牒』には「下野国高田住」と記されており<sup>5</sup>、後の高田派では真仏は大内国春の長男で椎尾弥三郎と称したと伝えられている<sup>6</sup>。また親鸞の消息には親鸞から真仏へ送ったものが多数残され<sup>7</sup>、当時の有力な弟子であったことが窺える。

この真仏の後を継いだのが、高田顕智（一二二六―一三二〇）で

あり、真仏に代わり高田門徒の指導者として活躍した。当時の高田門徒について記した『三河念仏相承日記』には、真仏、顕智などが三河地方の薬師寺を拠点として教化を行ったことが記されており、顕智の代には、高田門徒が三河方面まで教線を拡大していたことが知られる<sup>8</sup>。さらに「覚信尼大谷敷地寄進状」や「信海等、念仏衆に告状」などの京都大谷廟堂設立の文書に顕智の名を確認することが出来<sup>9</sup>、顕智が廟堂の設立と維持に尽力したことが窺える。このように顕智は当時の初期真宗において指導者的な役割を担っていたことが分かる。

それでは顕智は戒律についてどのように考えていたのだろうか。初期真宗において大きな活躍をした顕智であるが、彼の教学理解については、未だ明確になっていない。これは顕智には親鸞の著作の書写や『聞書』、『抄出』などの經典の引用しか残っておらず、このため顕智自身の思想を研究することが困難であることに原因がある。先行研究では特に『聞書』などを中心に検討されており、戒律や食事に関する典籍の引用が多いことから、顕智は、戒律関係の典籍に関心があったと考えられてきた<sup>10</sup>。

さらに顕智は持戒堅固、持律堅固であつたとする文献もあり<sup>11</sup>、それを肯定する先行研究も多数ある<sup>12</sup>。しかし顕智には戒律を守っていることを窺わせる記述は見られない<sup>13</sup>。一方江戸時代の文献には、顕智の持戒について記しているものが見られる。享和二年（一八〇三）に脱稿の奥付がある高田派真淳の『下野大戒秘要』に次の

ように見ることが出来る<sup>14</sup>。

問曰、畜妻、通儀ニ非サルヲ所談ノ如クナラハ、則高田後何ソ持戒ノ人無ヤ。答テ曰ク我カ真仏、顕智ノ二師持戒之精密ナル横目皆之ヲ知ル。豈煩ハシテ辯セン乎。<sup>15</sup>

この『下野大戒秘要』は、江戸時代の高田派で戒律復興運動が盛んであつた時期に刊行されたもので、親鸞の門流として戒律の立場を明らかにし、戒律の有用性を説いたものである。この一文は、親鸞は出家して戒律を受けた身であつたが、僧侶として始めて妻を娶つたという主張の直後に記された文章である。

ここでは、最初に親鸞が行つた妻帯は一般的に僧侶が行うことではないが、高田の門弟の中に持戒の人がいたのではないかという問いを起こしている。その回答として、真仏、顕智の二師は、戒を持つことに関して細心の注意をはらっており、そのことは多くの人が見て知っていたと答えている。ここでは、明らかに顕智を持戒の人と記しており、また顕智だけでなく、真仏も戒律を持っていたと記されている。このように顕智の持戒の記述は、江戸時代以降の文献に見られることから、顕智が戒律を持っていたという根拠にはならない<sup>16</sup>。また顕智が戒律を持っていなかったからこそ、後述する五辛や肉食の問題を解決しようとしたと考えられる。

次に顕智の戒律理解について検討を行いたい。顕智が記した『聞

書』中の典籍の引用には、戒律に関するものも抜き出している。以下は『聞書』中の『摩訶僧祇律』の引用である。

一 戒律三種沙弥者

一 麤烏沙弥七歳従り十三歳至ル也

二 応法沙弥十四歳従り十九歳至ル也

三 名字沙弥二十歳従り七十歳至ル也<sup>17</sup>

ここでは『摩訶僧祇律』の沙弥の名称が年齢によって三種に変遷することを説く文を引用している<sup>18</sup>。沙弥とは出家して十戒を受持し、具足戒を受けるまでの男子のことである。まず七歳から十三歳までが麤烏沙弥、十四歳から十九歳までが応法沙弥、二十歳から七十歳までが名字沙弥としている。このように戒律を否定した親鸞の門下が沙弥の名称についての典籍を引用していることは、注意すべきである。

次に顕智が記した『大名目』を見ていきたい。この『大名目』は、『観無量寿経』と善導の『観無量寿経疏』に出る基本的な仏教用語を図式にまとめたものである<sup>19</sup>。最初に聖道門と浄土門が分けられ、次に定善と散善に分かれている。そして散善中の戒善の部分は、非常に細かく戒が分けられている。

顕智『大名目』 末尾の図表を参照

まず小乗戒には、五戒、二百五十戒、五百戒、沙弥戒などが記され、大乘戒では、三聚浄戒が挙げられている。またその横には十無尽戒が掲げられ、それぞれ細かい簡単な注記が記されている。ここで注目すべきは、顕智が戒について詳細に知っていたという点である。こうした戒律に関する細かな文献は、親鸞や他の門弟たちには見いだすことが出来ない。

先述したように顕智は持戒持律の人と伝えられてきたが、顕智が記した『聞書』や『抄出』には、顕智が戒律を守っていることを窺わせる記述は見られない。ただし後年の江戸時代の真淳の『下野大戒秘要』には、真仏、顕智が戒を持っていたという記述が見られる。また『聞書』や『大名目』の記述から戒律について精通していた点が確認出来る。

## 二 『聞書』の引用典籍より見る高田顕智の念仏生活

### 1 五辛についての引用

顕智の『聞書』は食物関係や戒律関係の典籍が引用されていることが先行研究により指摘されてきた<sup>20</sup>。それでは顕智はどのような念仏生活を実践しようと考えていたのだろうか。『聞書』の典籍の引用から顕智が目指した念仏生活の一端を窺ってみたい。

最初に五辛についての典籍の引用を論究する。『聞書』では、『根

本説一切有部毘奈耶雜事』、『梵網經』、『諸經要集』「五辛緣第五」、『僧尼令』を引用している点が見られる。また文献名が記されていない「五辛ミナ七日七日」という引用も見られる。以下に引用された典籍を詳しく見ていきたい。

一 五辛ミナ七日七日ト云ヘリ 是ハ行ナムトスル事也ト云々<sup>21</sup>

一 僧尼令ニ云ハク

僧尼五辛ヲ食スレハ三十日苦使<sup>22</sup>

一 五辛報應經ニ云ハク

病開トキ伽藍ノ外白衣家ニ在リテ、服スルニ已ニ四十九日ヲ満ト。沐浴ノ後ハ許ス云々<sup>23</sup>

一 毘奈耶雜經ニ云ハク

蒜七日夜 葱三日夜 韭一日夜<sup>24</sup>

一 五辛梵網經ニ之ヲ説ク

一大蒜 二慈葱 三角葱 四蘭葱 五興菓<sup>25</sup>

最初に出典名が明記されていない典籍について見ていきたい。こ

こで引かれる「五辛ミナ七日七日」という典籍は、文献名が明記されていないが、その後にこれは修行をするのは七日七日の後と記している。またこの引用の後には五辛を食した後の僧侶の修行を禁止する文章が抜き出されていることから、この文献も同様に五辛を食べた後に行を禁ずるものを抜き出したものと考えられる。

それではこの出典不明の典籍はどこから引用された文献なのだろうか。先行研究では後述する『聞書』中の『諸經要集』と同様の引用が、良忠（一一九九―一二八七）の『観念法門私記』にも見られることが指摘されている<sup>26</sup>。この『観念法門私記』は良忠が建治二年（一二七六）ごろに執筆した『般舟讚私記』と同時期の成立である。以下に『観念法門私記』の該当箇所を見ていきたい。

五辛報應經云滿四十九日已上。南海傳云五辛皆七七日。<sup>27</sup>

この『観念法門私記』には、「五辛報應經云滿四十九日」としており、後述する五辛を食べた後は伽藍で修行してはいけないという文の中で四十九日間という日数のみ引用されている<sup>28</sup>。注目すべきは、その直後に『南海寄帰内法伝』の引用として「五辛皆七七日」と記していることである。この『南海寄帰内法伝』の引用は『聞書』にある出典不明の經典にある「五辛ミナ七日七日ト云ヘリ 是ハ行ナムトスル事也ト云々」と酷似している。

しかし『南海寄帰内法伝』「除其弊業」の本文は、以下の通りで



ある。

且つ葱蒜の如きは服するを許すも、尚ほ自ら遣して邊房に在ること、七日にして身を浄め洗浴して而進む。身若し未だ淨からざれば衆中に入らず。塔を遶るべからず、應に禮拜すべからず。其の臭穢なるを以て病に非ざれば聴さざるなり。

(且如葱蒜許服尚自遣在邊房。七日淨身洗浴而進。身若未淨不入衆中。不合遶塔不應禮拜。以其臭穢非病不聽。)<sup>29</sup>

この『南海寄帰内法伝』の本文では、ニラやネギを食した僧侶がはずれの房舎で身体を洗う期間は七日と記しており、『観念法門私記』や『聞書』のように「七七日」や「七日七日」とは記されていない。<sup>30</sup> ここで注目すべきは、顕智が良忠の『観念法門私記』と同じように『南海寄帰内法伝』を引用していることである。<sup>31</sup> これらのことから『聞書』中の出典不明の典籍は『南海寄帰内法伝』の引用であると考えられる。<sup>32</sup>

次に「僧尼令」の引用を見ていきたい。ここでは五辛を食べた僧は寺院の清掃などの三十日間の罰則があることを記している。

次に道世の『諸経要集』「五辛縁第五」の引用を見ていきたい。ここでは、病床の時に五辛を食べた場合、その後四十九日は伽藍の外白衣家に滞在し修行をしてはならないことを説く。そして四十九日後の沐浴の後は伽藍に戻っても良いと記している。

次に『根本説一切有部毘奈耶雜事』の引用を見ていきたい。ここでは特定の野菜を食べた場合、僧侶の修行を禁ずる期間を記している。禁止する野菜と期間は、ノビルが七日間、ネギが三日間、ニラが一日としている。

最後に『梵網經』の引用を見ていきたい。<sup>33</sup> ここでは僧侶が食べることが禁ずる五辛を記している。そして五辛であるニンニク、ネギ、アサツキ、アララギ、ニラを挙げている点が確認出来る。

以上、これら五点の引用は全て五辛に関するものであることが分かる。注目すべきは、『南海寄帰内法伝』、「僧尼令」、『諸経要集』、『根本説一切有部毘奈耶雜事』の典籍は、その多くが五辛を食べた後の規定が引用されており、このことから顕智が場合によつては五辛を食べることもやむをえないと考えており、その後どのような処置を行うのか関心を持っていたと考えられる。また顕智の典籍の引用は、良忠の『観念法門私記』にある文章と酷似した文も見られる。

## 2 肉食についての引用

次に肉食に関する典籍の引用として、『律宗新学名句』、『大般涅槃經』巻四、巻十六、巻三十を引用している。以下にこの四点を詳しく見ていきたい。

まずは『律宗新学名句』の引用である。<sup>34</sup>

一 律師新学名句ニ云ワク

戒名ニ云ク 五種正食

一 飯 二 乾飯 三 麴 四 魚 五 肉 音アルモノ足アルモノ  
コレライマス<sup>35</sup>

ここでは、僧侶が食すべき五種正食として、飯、乾飯、麴、魚、肉の五点をあげている。

次に「肉食事」から始まる『大般涅槃經』卷四を見ていきたい。<sup>36</sup>

## 肉食事

### 一 大般涅槃經

善男子。今日從始テ聲聞弟子食肉聽サス。若シ檀越信施ヲ受ケム時ニハ。應是ノ食ハ、子肉ノ想ノ如シト觀スヘシ。迦葉菩薩復佛白シテ言ク。世尊云何ソ如來食肉ヲ聽シ下ハサルト。善男子夫レ食肉ハ大慈ノ種ヲ斷スレハ也。迦葉又如來ニ言サク。何カ故ソ先ニ比丘三種ノ淨肉ヲ食セムコトヲ聽シ下フヤ。迦葉是ノ三種ノ淨肉ハ事ニ隨テ漸制ス。乃至

善男子。應彼ノ尼乾ノ所見ニ同スヘカラス。如來制シ下フ所ノ一切禁戒ニ各意異意有リ。故ニ三種ノ淨肉ヲ食コトヲ聽ス。異想ノ故ニ十種ノ肉ヲ斷ス、異想ノ故ニ一切悉ク斷ツ自死スル者ニ及フ。迦葉、我今日從諸ノ弟子ヲ不レト也制ス。復得。一切ノ肉ヲ食スルコトヲ也。<sup>37</sup>

この文の内容は、最初に釈尊が食肉は慈の種を断じるために、肉食することは禁ずるが、三種の淨肉は許すというものである。この三種は、殺されるところを見ていない、自分に供えるために殺したと聞いていない、自分に供えるために殺したと知らない、の三つである。

次に『大般涅槃經』卷十六の「十種肉」を引用している。

## 涅槃經

### 一 第十八卷或言タマハク

如來比丘十種ノ肉食コトヲ聽サス。何等ヲカ十ト爲スル。人蛇象馬驢狗師子猪狐獼猴其ノ餘ハ悉ク聽スト。或ハ言ク一切聽スト。乃至。<sup>38</sup>

冒頭の「第十八卷或言タハク」とは、『大般涅槃經』北本では「十種肉」が「十八卷」に記されていることを示している。これは釈尊が比丘に十種類の肉以外の食肉を許すことを示した文で、十種類とは、人、蛇、象、馬、驢、狗、師子、猪、狐獼、猴の十であるとす<sup>39</sup>る。

最後に『大般涅槃經』卷三十の引用を見ていきたい。

### 一 大般涅槃經卷第三十三

菩薩摩訶薩ハ飢饉ノ世ニ於テ餓ヘタル衆生ヲ見テ、龜魚ノ身無量由旬ト作テ復タ是ノ願ヲ作ス。願クハ諸ノ衆生我カ肉ヲ取ラム時ニ取ニ隨ヒ生ニ隨テ、我ガ肉ヲ食スルニ因リテ飢渴ノ苦ヲ離テ、一切悉ク阿耨多羅三藐三菩提ノ心ヲ發ス。菩薩發願ス。若シ我ニ因ルコト有ラム飢渴ノ者ト雖モ、未來ノ世ニ速カニ廿五有ノ飢渴ノ患ヘヲ遠離スルコトヲ得ム。菩薩摩訶薩是ノ如ノ苦ヲ受テ心退セサル者ハ、當ニ知ルヘシ。必定シテ阿耨多羅三藐三菩提ヲ得ム。復タ次ニ菩薩疾疫ノ世ニ於テ病苦ヲ見者ハ、是ノ思惟ヲ作ス。藥樹王ノ如シ。若シ病者有テ、根ヲ取り莖ヲ取り枝ヲ取り葉ヲ取り花ヲ取り果ヲ取り皮ヲ取り膚ヲ取ル。悉ク病愈イユルコトヲ得。願ハ、我カ此ノ身モ亦復タ是ノ如シ。若シ病者有テ聲聞身ニ觸レ、血肉乃至骨髓ヲ服食セハ病悉ク除愈セム。願ハ諸ノ衆生我カ肉ヲ食セム時、惡心ヲ生セスシテ子肉ヲ食スルカ如クセヨ。我病ヲ治ニ已テ常ニ說法ノ爲ニ、願クハ彼ヲ信受シ思惟シ轉教セム。<sup>40</sup>

この『大般涅槃經』卷三十は、菩薩は飢餓の時に飢えた衆生を見て、衆生のために亀、魚の身となる発願をするという内容である。そして衆生が亀、魚の身を食べることで、飢渴の苦しみを離れ、阿耨多羅三藐三菩提の心を起こすことを発願の内容としている。また病身の者が、血肉や骨髓を食すれば、病が癒えると説かれている。このように引用されている文献は、肉食を容認する部分を抜き出し

ている。

この内『大般涅槃經』中の「三種淨肉」と「十種肉」の引用は、高田専修寺に蔵する親鸞の真跡の断片である『見聞集』中の「涅槃經」にも見ることが出来る<sup>41</sup>。この『見聞集』中の「涅槃經」は、親鸞が『大般涅槃經』の要文を引用したものである<sup>42</sup>。顕智の『聞書』における『大般涅槃經』の引用は、引用箇所が親鸞と一致するため、顕智が親鸞の「涅槃經」を見て『聞書』に引用したことは明らかである。注目すべきは親鸞の「涅槃經」には、『聞書』にある『律宗新学名句』や『大般涅槃經』の卷三十の引用は見られない点である。このことから顕智が肉食についての經典をまとめる際、最初に親鸞の「涅槃經」を見て引用した後に、自身でも肉食に関する典籍を探して加えていたものと考えられる。

## 終わりに

以上高田顕智に焦点をあてて顕智の著作や典籍の引用を中心に、初期真宗の念仏生活について検討した結果、以下のことが分かった。

- ① 高田顕智は持戒持律の人と伝えられてきたが、顕智が記した『聞書』には、顕智が戒律を持っていたという記述はない。しかし後年の江戸時代の真淳の『下野大戒秘要』には、顕智が戒



を持っていたという記述を見ることが出来る。このように顕智の持戒の記述は、江戸時代以降の文献であるため、顕智の持戒の根拠とはならない。また『聞書』には『摩訶僧祇律』の三種沙弥の引用が見られ、『大名目』には、小乗戒、大乘戒、十無尽戒など戒律の種類について非常に細かく記している点が確認出来る。このことから顕智は戒律について精通していたと考えられる。

②高田顕智の『聞書』には、五辛を食べた後の処置や肉食を容認する典籍を引いている。これは顕智が場合によっては五辛や肉食を食べることもやむを得ないと考えており、その後の処置や食べる理由に関心があったと推察する。また引用された典籍には、良忠の『観念法門私記』にある文章と酷似した文も見られる。

以上のことから見て、当時の初期真宗は、戒律を得ていない身でどのように念仏生活を目指すかという問題が生じていたことが推測される。この問題は親鸞が戒律を否定し、自らも戒律に代わる制誠を製作しなかったことが原因の根底にあった。そして戒律に関心が深かった高田顕智は、戒律にそむいているという罪悪感をもっており、戒律にそむく場合でもどうすれば罪悪感を解決し、よりよい念仏生活を送ることが出来るかという問題意識があったと考えられる。

その結果戒律にそむいた際の対処方法を戒律の典籍に求めたと推察する。

このように親鸞が往生に戒律は不要と主張してもなお、門弟たちは無戒の念仏生活を送るために、その根拠を戒律の典籍に求めたことは非常に興味深い。また顕智の典籍の引用は、他の高田門徒にも見ることが出来る。これらの点については次回の課題としたい。

<sup>1</sup> 吉田清氏は、『七箇条起請文』の三条で、法然が念仏聖集団内の戒行的統制に期待したとし、続けて次のように述べている。「しかしそれは自覚的なもので自然法的道德法であって、教団の社会的規範となる律的要素は感じられない。源空は自らの集団に、僧院の統制規範すらもたずに、無防備のまま、念仏聖を門弟として容認してきた状況を知ることができる。」

吉田清『源空教団成立史の研究』（名著出版、一九九二年）一一二―一一五頁。

<sup>2</sup> 親鸞の戒律観については、以下の論文を参照。

小串侍「宗祖親鸞と戒律」（『日本仏教学会年報』、一九六六年）三一―三三頁。

武田賢寿「真宗と戒律」（『教行信証化身土末巻の研究』、一九七六年）一六一―一七八頁。

細川行信「親鸞の「無戒名字ノ比丘」について」（『親鸞聖人と真宗』、

日本仏教宗史論集、一九八五年）六号、二九～四一頁。

土橋秀高『真宗行儀と戒律』（『戒律の世界』、一九九三年）八〇五～八三〇頁。

新井俊一「親鸞における無戒の倫理」（『日本仏教学会年報』、二〇〇九年）七四号、一五～二六頁。

三木彰円「親鸞における「愚禿釈」の名乗りと「無戒名字の比丘」（『日本仏教学会年報』、二〇〇九年）七四号、二六五～二七五頁。

森剛史「親鸞の無戒思想―末法の仏者とは」（『真宗研究』、二〇〇六年）五〇号、四四～五八頁。

新光晴「親鸞とその門弟における大乘戒」（『日本仏教学会年報』、二〇一二年）七八号。

寺井良宣『天台円頓戒思想の成立と展開』（法蔵館、二〇一六年）二二〇～二四六頁。

<sup>3</sup> 初期真宗における制禁については以下が詳しい。

長沼賢海『日本宗教史の研究』（教育研究会、一九三一年）一九〇～二一一頁。

青木馨「中世真宗教団の制禁及び掟について」（『同朋学園仏教文化研究所紀要』一九八二年）四号、九三～一一五頁。

日下無倫「中世に於ける真宗と戒律」（『仏教史学』、一九二五年）一号、三二～四九頁。

赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店、一九五七年）、一一七～一九頁。

<sup>4</sup> 日下無倫氏は、制禁や掟の発生について以下のように記している。

「すなわち原始真宗の掟即ち戒律が大谷本廟を中心として出来上がったものではなく、むしろその最初が信濃門徒を中心とした地方的な門信徒の上に成立したものと考えられる。」（日下無倫「中世に於ける真宗と戒律」、三二～四九頁。）

また青木馨氏は、制禁について以下のように記している。

「初期教団の場合、制禁の内容は教法に関連する箇条と教法とは直説関係しない生活規範、いわば世俗面に関する箇条とに大別出来る。」（青木馨「中世真宗教団の制禁及び掟について」、一〇四頁。）

<sup>5</sup> 真宗史料集成 卷一、一〇〇一頁。

<sup>6</sup> 二宮町史編さん委員会編『二宮町史 通史編Ⅰ』（二宮町、二〇〇八年）四二四頁。

<sup>7</sup> たとえば『末灯抄』第四通、第十三通など。『定本親鸞聖人全集』卷三、七一～七二、八九～九一頁。

<sup>8</sup> 『三河念仏相承日記』真宗史料集成 卷一、一〇二五～一〇二六頁。

<sup>9</sup> 「覚信尼大谷敷地寄進状」真宗史料集成 卷一、九八五頁～九八六頁。

「信海等、念仏衆に告状」真宗史料集成 卷一、九八六頁。

<sup>10</sup> 安藤章仁『聞書』『影印高田古典』卷三、六四一頁。

<sup>11</sup> 本川光定「真淳の『下野伝戒記』について」（『高田学報』、一九六一年）四十八号、三一～四〇頁。

栗原直子「真淳における戒律と念仏の研究『下野伝戒記』『下野大戒秘要』を中心として」(『龍谷大学大学院文学研究科紀要』、二〇一一年)第三十集、四八～五〇頁。

<sup>12</sup> 生桑完明「顕智上人自筆の聞書について」(『高田学報』、一九四七年)四十一卷、四十二～四十九頁。

安藤章仁『聞書』『影印高田古典』巻三、六四一頁。

顕智には、肉食を肯定する經典の引用が見られる点や顕智自身が高田真仏の娘婿という記録が見られる。

<sup>13</sup> 後の高田派でも顕智について記している文は見られる。たとえば真慧が文明四年(一四七二)に記した『顕正流義鈔』(真宗史料集成、巻四、十頁)、同じく真慧が明応三年(一四九四)に記した『十六問答記』(真宗史料集成、巻四、四十一頁)、天文十一年(一五四二)に恵珍が物語ったことを聞書にした『代々上人聞書』(真宗史料集成、巻四、八十一頁)、高田専修寺が正徳元年(一七二一)親鸞の四百五十回忌にあてて製作した『高田山峯の枝折』(真宗史料集成、巻四、百頁)などがある。しかし顕智が親鸞、真仏から教えを相承したとする記述はあっても、持戒についての記述は見られない。

<sup>14</sup> 栗原直子「真淳における戒律と念仏の研究『下野伝戒記』『下野大戒秘要』を中心として」五四頁。

<sup>15</sup> 『下野大戒秘要』十四丁表。『下野大戒秘要』は、三康図書館の資料を使用した。

<sup>16</sup> 栗原氏によれば、高田派第十八世法主の円遵は、真淳とともに戒律

の復古運動に尽力した人物であり、円遵の著作の『高田沂源論』には、親鸞に始まる高田派の伝戒相承の次第が述べられているとしている。

<sup>17</sup> 栗原直子「真淳における戒律と念仏の研究『下野伝戒記』『下野大戒秘要』を中心として」五五～五六頁。

<sup>18</sup> 真宗史料集成 巻一、六二二頁。

『摩訶僧祇律』本文の該当箇所については以下の通り。

「沙彌有三品。一者從七歲至十三。名爲驅烏沙彌。二者從十四至十九。是名應法沙彌。三者從二十上至七十。是名名字沙彌。是三品皆名沙彌。」『摩訶僧祇律』(大正藏二二、四六一、中)

<sup>19</sup> この『大名目』は、筆跡は顕智のものであるが、僅かながらに筆致に違いが見えるために、顕智の壮年期のものと考えられている。また中川和則氏は、『大名目』のような卷子本の図式的な体裁は、顕智の『愚禿抄』上巻、下本巻、下末巻以外見られないとする。

中川和則『大名目』『影印高田古典』巻四、五六四～五七〇頁。

安藤章仁『聞書』『影印高田古典』巻三、六四一頁。

<sup>21</sup> 真宗史料集成 巻一、六二二頁。

<sup>22</sup> 真宗史料集成 巻一、六二二頁。

<sup>23</sup> 真宗史料集成 巻一、六二二頁。

『諸経要集』本文の該当箇所については以下の通り。

「又五辛報應經云。七衆等不得食肉熏辛。讀誦經論得罪。有病開在伽藍外白衣家。服已滿四十九日。」『諸経要集』(大正藏五四、

一八九、中)

また『法苑珠林』にも同様の記述が見られる。

「又五辛報應經云。七衆等不得食肉葷辛。讀誦經論得罪。有病開。在伽藍外白衣家服。已滿四十九日。」(大正藏五三、九八一、中)

24 真宗史料集成 卷一、六二二頁。

『根本説一切有部毘奈耶雜事』本文の該当箇所については以下の通り。

「佛言。苾芻有病。欲食蒜者。所有行法我今當説。諸病苾芻若食蒜者。應住寺側邊房。不得用僧臥具及大小行室。不得入衆。亦不爲俗人説法。不遶制底。不禮香臺。不往俗家。園林天廟衆人聚處皆不應往。可於屏處而嗽服之。設人見時不生譏恥。若服了時。於七日内仍住於此。服葱可停三日。若韭一日。」『根本説一切有部毘奈耶雜事』(大正藏二四、二三〇、中)

25 真宗史料集成 卷一、六二二頁。

『梵網經』本文の該当箇所については以下の通り。

「若佛子。不得食五辛。大蒜革葱慈葱蘭葱興菓。是五種一切食中不得食。」『梵網經』(大正藏四〇、六七二、上)

26 安藤章仁『聞書』『影印高田古典』卷三、六九六頁。

27 浄土宗全書 卷四、二五六頁。

28 日数しか記していない理由について『観念法門私記冠註』では、『梵網經』の該当箇所を見ておらず、『法苑珠林』や『諸經要集』から引いたとしている。

『観念法門私記冠註』は良仰校正本の冠註を浄土宗全書刊行の際別出

したもので作者は不明である。(『観念法門私記冠註』解説、紀氏隆真、浄土宗全書 卷二十一、一七八頁。)

「此經末勘法苑百十三諸經要集二十等引之」『観念法門私記冠註』(浄土宗全書 卷四、二七九頁)

29 大正藏五四、二二五、上。

30 この「七七日」という日数について『観念法門私記冠註』にて「南海傳云 第三卷云且如蔥蒜許服尚自遣在邊房七日潔身洗浴而進身若未淨不入衆中等(今云七七七蓋所覽之本不同耳)」(浄全四、二七九)と記している。しかし大正藏には、該当箇所が「七七日」と記している異本は見られない。(大正藏五四、二二五、上)

31 『聞書』中の『諸經要集』の引用と同様の記述は、『法苑珠林』にも見ることが出来るが、『観念法門私記冠註』にも『法苑珠林』と『諸經要集』が引かれている点に注意したい。詳細は註二十八を参照。

32 『南海寄歸内法伝』においては、良忠が「七七日」と記しているのに対し、顕智は「七日七日」としている。このように顕智と浄土異流との関係については今後さらに検討する必要がある。

33 『影印高田古典』卷三(六九六頁)では、この引用は『梵網經菩薩戒本疏』としているが、五辛の記述は、『梵網經』や上述した『諸經要集』など多くの經典に見られ、『梵網經菩薩戒本疏』のみに見られるものではない。顕智の「五辛梵網經」の引用は、「革葱」を「角葱」としている点に特徴があるが、『梵網經』、『梵網經菩薩戒本疏』、『諸經要集』などに「角葱」と記している經典は見られない。ここでは顕

智が「五辛梵網經」と記している点から、『梵網經』を挙げた。

<sup>34</sup> 『聞書』では、「律師新學名句」の「師」の隣に「宗イ」と記されている。これは、「律師新學名句」と記した後に、師が宗であったことに気づき、訂正したものと考えられる。

真宗史料集成 卷一、六二〇頁。

<sup>35</sup> 真宗史料集成 卷一、六二〇頁。

『律宗新學名句』本文の該当箇所については以下の通り。

「五種正食一飯二乾飯三麴四魚五肉。」『律宗新學名句』（統藏經五九、六八二、上）

また同様の記述は、道宣の『四分律刪繁補闕行事鈔』や法雲の『翻詠名義集』にも見える。

「四分中有五種蒲闍尼此云正食謂糗飯乾飯魚肉也。」『四分律刪繁補闕行事鈔』（大正藏四〇、一一七、下）

「四分律云。有五種蒲闍尼。此云正謂糗飯乾飯魚肉也。」『翻詠名義集』（大正藏五四、一一七三、下）

<sup>36</sup> 顯智は「玉」を「下」と書き下している文献も見られる。ここでは原文をそのまま引用した。

<sup>37</sup> 真宗史料集成 卷一、六〇九頁。

<sup>38</sup> 真宗史料集成 卷一、六〇九～六一〇頁。

<sup>39</sup> 『聞書』には、『大般涅槃經』南本卷十六と南本卷三十三の間には、『大般涅槃經』南本卷二十九（大正藏一二、七九六、上）が引かれている。

「卷三十一師子吼菩薩品第十一之五言

復發誓願。爲欲說法度衆生故。或作驢鹿羆鵠獼猴龍蛇金翅魚鼈狐兔牛馬之身。」（真宗史料集成 卷一、六一〇頁）

この引用は畜生界に墜ちた衆生のために菩薩が十の動物の身と変化する事が記されているが、内容は直接的に肉食のことを記していない。しかし直後の引用が菩薩が魚、亀と変化して飢餓の衆生の前に現れるという引用であるのは前後の関係とふせて注意すべき点である。

<sup>40</sup> 真宗史料集成 卷一、六一〇頁。

<sup>41</sup> 親鸞が「三種淨肉」と「十種肉」を書写した「淨肉文」は高田専修寺に現存している。しかし『見聞集』中の「涅槃經」は『大般涅槃經』南本が用いられているのに対して、「淨肉文」は卷数が示されておらず、文章も短いため、北本、南本のどちらを書写したのか不明である。

『親鸞聖人真跡集成』卷九、解説、三六五～三六六頁。

土橋秀高『戒律の研究、第二』（永田文昌堂、一九八二年）三〇八～三〇九頁。

卷四、卷十六の引用は、以下を参照。

『親鸞聖人真跡集成』卷九、「見聞集Ⅱ、涅槃經」、一一九～一二二頁、九五～九六頁。

<sup>42</sup> この『見聞集』は、親鸞が『唯信抄ひらがな本』の袋とじを切り開いて、裏側に『浄土五会念仏略法事儀讃』、『涅槃經』などを書写したもので、表紙に「見聞集」、「愚禿親鸞」とある。この「涅槃經」は、

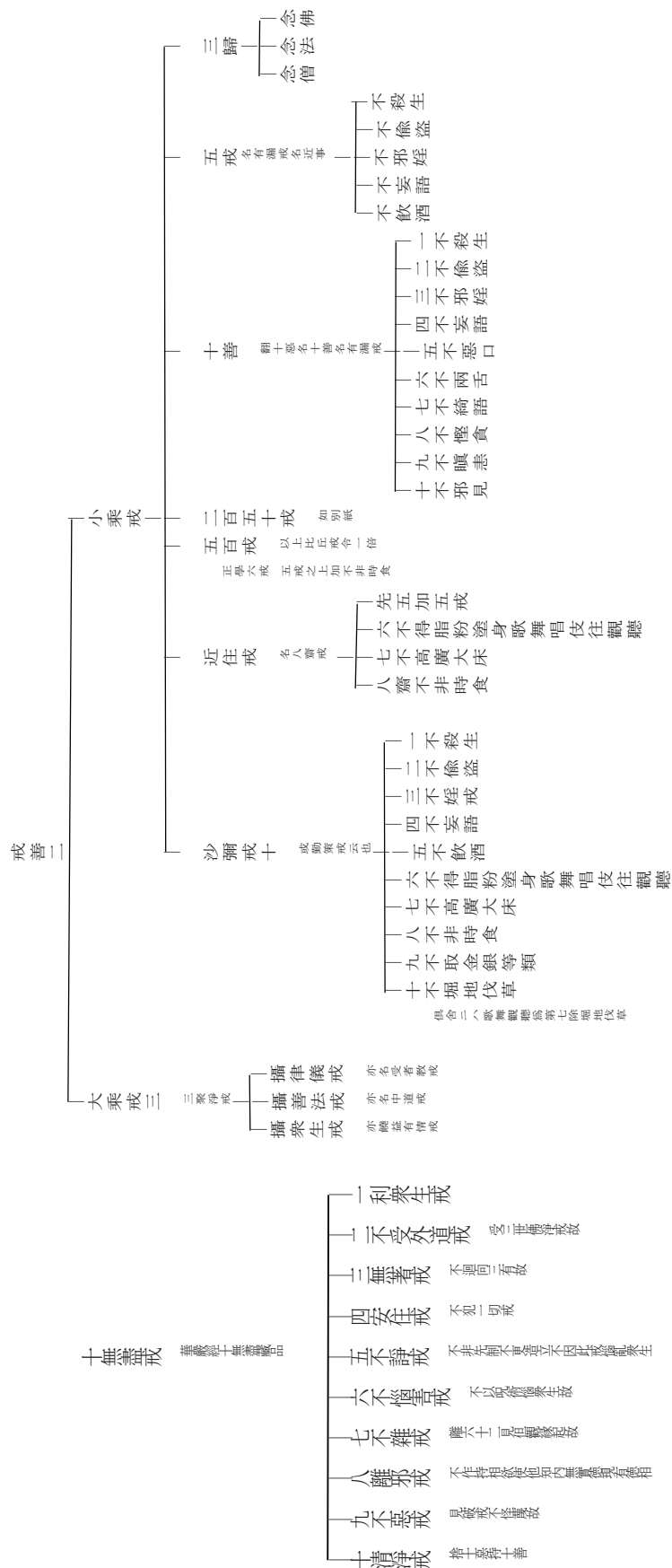


『唯信抄ひらがな本』の「すくわれかたしとおもふへき」から終わりまでの背面に書写されている。

『親鸞聖人真跡集成』巻九、凡例、解説、三六五～三六六頁。

『定本 親鸞聖人全集』六、解説、二四一～二四五頁。

図表 『大名目』『影印高田古典』 卷三、二八七、二八九頁を参照。



## **Nenbutsu Lifestyle of Early Shin Buddhism Having No Commandments: With a Focus on Takada Kenchi**

ITAJIKI, Masumi

There is no evidence that 親鸞 created any regulations or prescriptions for bringing together his disciples. However, we can infer that Shinran's disciples established prescriptions called “prohibitions” (seikin) to consolidate their own groups of disciples. However, there have been no sources to consult other than the prohibitions themselves to investigate the prescribed lifestyles of disciples. We focus on 高田顕智 and analyze his nenbutsu lifestyle. The following conclusions were reached after a thorough analysis. First, 大名目 and other sources tell us that Kenchi was an expert in Buddhist precepts. Moreover, 聞書 cites on what to do after eating the five pungent roots and the acceptability of eating meat and its exceptions. Hence, we can conclude that Kenchi's thoughts were on how to lead a religious life while paying attention to what he ate and maintaining his health.